

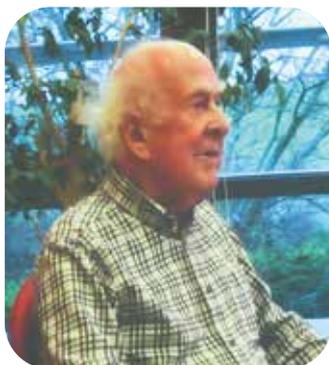
【特集】 「ノーベル賞受賞者に聞く！ILC推進国際シンポジウム」

ILC推進国際シンポジウム「ピーター・ヒッグス博士が語る ヒッグス粒子とILC」は2月8日、東京大学伊藤国際学術研究センターで開催されました。岩手大学、広島大学や九州大学には、東京会場と中継で結ぶサテライト会場も設置され、全会場で約600人が参加しました。

2013年にノーベル物理学賞を受賞したピーター・ヒッグス博士からのビデオメッセージや、2008年に同賞を受賞した小林誠博士らによるパネルディスカッションなどが行われました。

ピーター・ヒッグス 氏

エディンバラ大学名誉教授。1960年代に、質量の起源となる「ヒッグス粒子」の存在を提唱し、2012年に実験で立証され、翌年ノーベル物理学賞を受賞。



私は1964年に新粒子（ヒッグス粒子）の存在を予測し、欧州素粒子原子核機構（CERN）での実験によって2012年にその存在が立証された。それ以降もCERNの大型ハドロン衝突型加速器（LHC）によって粒子の特性に関する実験が進められている。

加速器の建設は少なくとも10年間かかる大きなプロジェクトだが、大量の素粒子を作り出せる次世代の施設を早く整備する必要がある。ILCの候補地とされる日本はヒッグス粒子研究を主導する立場にある。

このような新しい科学研究計画は経済的に負担になると見られるかもしれないが、施設を建て、研究することが地元経済にもたらす影響は、そうした負担を超えるものだ。皆さんが成功させることを祈っている。

村山 齊 氏

2000年よりカリフォルニア大学バークレー校教授。
2013年よりリニアコライダー・コラボレーション副ディレクター。

ヨーロッパにあるCERNという研究所では、イスラエルやパレスチナなど争いをしている国の人も一緒に集まって研究をしている。そういう人たちが一緒にデータを共有するために生まれたのがWeb※システム。CERNで開発されたこのWebシステムが、世界の人々を結びつけるという役割をしてきた。人類共通の疑問を追求していくことは、国同士のいがみ合いは関係なく、一緒に仕事をする。CERNはこのようなことを実現し、基礎研究を通じて世界平和をリードしているということで、国連のオブザーバーに選ばれている。CERNのような世界各国から多くの研究者が集い研究する施設が日本に作られると、世界平和にも貢献できるのではないかと考えている。ILCは私たちのルーツを知るだけでなく、いろいろな形で世界に貢献できる施設になりえると思う。ぜひILCを日本に、と考えている。

※ Web (World Wide Web 略称 WWW)



CONTENTS

- ★ 特集 ILC推進国際シンポジウム
- ★ Q&Aコーナー
- ★ ピックアップニュース
- ★ Bell'sコーナー
- ★ ニュースクリッピング
- ★ What brought you to Ichinoseki?



会場の様子



ピックアップニュース

▶ 一関二高でILC関連セミナー



一関第二高等学校において、同校と市の主催によるILC関連セミナー「地域の未来を考える」を実施しました。1年生約200人はILCの概要と将来のまちづくりに関する講演を聴講後、将来のまちづくりについてグループディスカッションを行い、ポスターにまとめ、発表し合いました。

▶ 一関工業高校生徒による出前授業



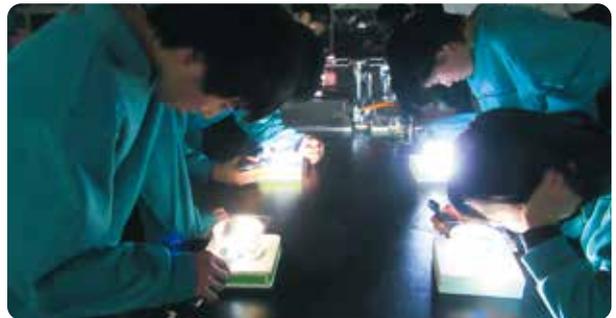
一関工業高等学校出前授業プログラム『高校生と学ぼう！「電気と私たちの暮らし」』が2月12日、赤荻小学校において実施されました。電子科の生徒8人は、事前にILCに関するレクチャーを受け、独自に説明資料を作成し、赤荻小学校6年生48人に対し、理科の授業の中でILCについても説明を行いました。

▶ 花泉高校でILC関連講演会



11月28日、花泉高等学校において、同校と市の主催によるILC関連講演会「ILCから地域を考えよう」を実施しました。全校生徒105人を対象に、岩手大学教授の成田晋也氏なりた しんやと岩手県国際室の和山アマング氏が講師を務め、ILCの概要や将来のまちづくり、多文化共生について講演しました。

▶ 中学生ILC特別授業



市では、市内の中学校を対象とした「ILC特別授業」を実施しています。2月には、高エネルギー加速器研究機構（KEK）素粒子原子核研究所研究員の倉田正和氏くらた まさかずを講師に、4校（萩荘中、大原中、桜町中、興田中）において講演や霧箱実験を行いました。

Q&A コーナー

市民の皆さんから寄せられた質問等にお答えするコーナーです。



ILC導入のメリットは何でしょうか？



ILCは、世界最先端の研究を担う、国際科学技術イノベーションの拠点形成につながる一大プロジェクトであり、東北岩手の地において、多くの人材が定着・交流し、東日本大震災津波からの創造的な復興のシンボルともなる計画です。ILCは、その物理学的意義に加え、次のような地域の新しい姿をもたらすものと期待されており、そのために県や関係団体が連携して取り組みを進めています。

- ①多くの外国人研究者等や最先端の技術集積と地域の持つ多様な資源（一次産業、地元企業等）が相まって、人、モノ、情報が世界と行き交う国際的な研究拠点となる。
- ②ILCに関する技術や研究成果の産業化を支援するイノベーション拠点の整備により、「いわて」が世界中の企業から選ばれる地域となり、多くの人、モノの集積が進み、新たなサービス産業が創出されるなど、活気あふれる地域になる。
- ③県産木材を活用した研究施設、居住施設の整備やILCの排熱などを活用したエネルギーの利活用など、持続可能かつ効率的なエネルギーマネジメントを行うまちづくりが進む。

ニュースクリッピング

弘兼憲史氏マンガ郷特別賞受賞

1月25日、岩手県主催のいわて漫画大賞とマンガ郷いわて特別賞の表彰式が開催され、「会長 島耕作」を通じ、ILCの普及に貢献したとして、漫画家の弘兼憲史氏が特別賞を受賞しました。達増知事らと対談した弘兼氏は「多くの人にILCを知ってもらおうきっかけになれば」と話しました。

学術会議マスタープラン2020公表

1月30日、日本学術会議はマスタープラン2020を公表し、ILC計画は学術的意義を有する「学術大型研究計画」に選定されました。文部科学省が日本学術会議のマスタープラン（学術的意義の高い大型研究計画のあり方について一定の指針を示すもの）での議論を求めた経緯があり、学術的なプロセスを経たことで、次の段階に進むとされています。

押井守氏がわんこそば大会に参戦!

2月11日、花巻市において開催された「わんこそば全日本大会」に、ILCサポーターズの発起人であり映画監督の押井守氏がゲストとして参加しました。ミニトークショーでは「国民の力でILCが必要ということを政府にアピールしたい。建設実現のために協力してほしい」と話しました。押井氏はわんこそばにも挑戦し、記録は59杯でした。



ILC推進モデル校成果発表交流会

2月19日、県庁において「未来のILCを担う人材育成事業」成果交流会が開催され、当事業の実施校でILC推進モデル校に指定されている8校が、今年度実施した取り組みの成果を発表しました。市内で唯一、モデル校に指定されている一関第一高等学校の生徒の皆さんは、フィールドワークを通じてILCの建設候補地である一関周辺の地理・歴史・自然について学んだことや、「磁石で電池を動かす」という実験の結果と考察について発表しました。

交流会の最後には、各校の生徒がグループに分かれ、ILCを通じて岩手がどう変わってほしいか語り合いました。



(一関第一高等学校の発表の様子)

ILC解説セミナーを開催

東北ILC準備室とKEKIは2月2日、奥玉市民センターを会場にILC解説セミナーを開催し、約80人が参加しました。

12月には室根、1月には東山でも開催しており、ILCに関する最新の動向や住民の皆さんのILCに関する関心事項について解説しました。

- モノのインターネット（IoT）や人工知能（AI）などの導入により、医療、教育など様々な分野で自動翻訳機能が活用されるなど、地域で暮らす外国人研究者・家族、地域住民が不便なく暮らすことができ、それぞれの文化が溶け込んだコミュニティが形成される。
- ILCの実現をきっかけとして、県内の科学館や天文台などの科学施設と連携したサイエンスツーリズムの展開や、外国人研究者と児童生徒とのサイエンスコミュニケーションを通じた科学技術に関する教育水準の向上により、多くの人々が訪れる魅力ある圏域が創造される。

(東北ILC推進協議会ホームページより)



「ILCによる地域振興」イメージ図（岩手県作成）



国際化推進員のベル・あいみです。
ここでは、私の仕事内容や生活していて
気づいたことなどを紹介していきます。



病気にかかったら

海外で病気にかかったら、誰でも不安になると思います。不安なことはたくさんありますが、私の場合は、どこに行けばよいか、クリニックと病院の使い分けで悩みました。オーストラリアでは救急などの場合を除いて、どの病気・症状でもまず総合診療医（GP）に診てもらいます。そこで対応できない場合は、大きな病院や専門医を受診するための紹介状を書いてもらい、次のステップを案内してもらいます。システムはともかく、海外から来た人が日本で病気にかかってしまったら、まず困るのがコミュニケーションだと思います。日本語がわからない場合はどうしているのでしょうか。よく聞く事例だと、日本語が話せる友人や通訳者と一緒に病院に行ってもらったり、携帯の翻訳アプリを利用したりして

いるようです。それでも解決しない場合は、仙台や東京などの多言語対応が可能な大きい病院へ行ったり、さらには、帰国してしまうケースもあるようです。

一関市では、緊急の場合、119番に電話をかけると多言語で対応することができます（詳しくはILC NEWS 29号に掲載）。また、市内では唯一、岩手県立磐井病院が医療通訳のサービスを実施しており、英語、中国語、タガログ語、韓国語に対応しています。利用する場合は、まず病院に連絡し、医療通訳の派遣をお願いしてください。病院からの依頼に応じて、提携先の奥州市国際交流協会が医療通訳ボランティアを派遣します。（料金は無料です。）

What brought you to Ichinoseki?

一関でこんなことをしています



こがねもり やらん
小金森 雅嵐さん 中華民国台湾出身

国際結婚がきっかけで来日し、21年が経ちました。農家の嫁として、仕事しながら農業の手伝いもしています。数年前からコンバインを運転するようになりました。日々、農業の大変さを実感しています。今まで、日本語・中国語翻訳や通訳の仕事もしていました。昨年10月から一関市観光協会に就職し、中国語対応職員として勤務しています。台湾や中国の観光客の案内や観光地情報の翻訳などに取り組んでいます。これからも色々な勉強を通じてステップアップを目指していきます。

プロフィール

- 趣味 読書、音楽鑑賞、歌舞伎
- 好きな場所 自宅、図書館、沼田家武家屋敷、浦島公園
- 好きな食べ物 あんこもち、ずんだもち
- 好きなイベント 一関・平泉バルーンフェスティバル



発行 岩手県一関市
編集 市長公室 ILC推進課
〒021-8501 岩手県一関市竹山町7番2号
TEL 0191-21-8315 FAX 0191-21-2164
URL <https://www.city.ichinoseki.iwate.jp/ilc/>
E-mail ilc@city.ichinoseki.iwate.jp

専用ホームページ、SNSで情報を発信中！



くわしくはこちらで検索！

一関市 ILC 検索

Facebook
Twitterでも発信中！

